



# 『袖振り機』



齊藤 想

『袖振り機』 齊藤 想

---

「なぜ、わが研究所の残り少ないお金を裂いてまで、こんな機械を作ったのですか！」

助手はここぞとばかりに教授を攻め立てた。研究室には、ひたすら袖を振るロボットが置かれている。

「君は万葉集を知っているか？」

「知っています。それと、この機械がどう関係するのですか」

「もちろん、おおありだよ。いいか、万葉集には“袖振る”という表現が多用されておる。現在とは意味が違ってな、当時は袖を振ることで魂を静めたり、恋人に気持を伝えたりすることができると思われていたのだ。まじないの一種だな」

「つまり、こいつはまじないをする機械というわけですか」

「ちがう！ 君はまったくもってわかっとらん。こいつは万葉集の世界を追体験するための機械なのだ」

教授は力説した。

「例えば、万葉集に収録されている額田王の歌に、“茜草指 武良前野逝 標野行 野守者不見哉 君之袖布流”という歌がある」

「何を言っているのか分かりません」

「君のために読み下すと“茜(あかね)さす、紫野(むらさきの)行き、標野(しめの)行き、野守(のもり)は見ずや、君が袖(そで)振る”というところだな。意味としては天智天皇が額田王に対してあまりにも袖を振るものだから、他人に見られてしまいますよ、と窘めた歌になる。つまり、この機械を紫野において袖を振ってもらえば、額田王の気持を現代にいながら理解できるというやつだ。これは万葉世界を堪能するためのワシ専用機だから、君にはこの道具を与えよう。”あしひきの”が山の枕詞であることは君も知っているだろ。”あしひきの”の意味は諸説あるが、わしが有力だと睨んでいるのは”足を曳いて登るほど険しい山”という意味だな。つまり、この道具を足に巻きつければ、いつでも”あしひき”体験ができるというわけだ」

「教授、これはスポーツ用品店に売っている足首用のアングルウェイトです。そもそも”袖を振られる”体験をしたいなら、こんな機械を作らなくても、友人にお願いして袖を振ってもらえばいいではありませんか。まさか、教授にはそのようなことすらお願いできる友達が一人もいないとか

」

教授は顔を真っ赤にして否定した。そして、指先を震わせながら、なぜか袖振り機と肩を組んだ。

「な、なにを言うか。そ、そのようなことは、決して……」

(終わり)

---